# 湖山池公園の利用拡大に関する研究

開発情報工学研究室　津村　友子

## 1.　研究の背景と目的

近年、急激な都市化の進展に伴い人口・産業の都市地域への集中、自然環境の喪失、産業公害の発生などの環境問題が深刻化してきた。そして快適環境の創出を図る施設として、都市公園の整備促進が期待されている。都市公園の整備にあたっては、市民がどのような利用を望みどのようなサービスを期待するのか、即ち公園でどのような利用ができれば満足感を得られるかといった視点が必要である。本研究では、2000 年 5 月開園となった湖山池公園を対象にし、湖山池公園の認知・利用状況、整備評価等に関するアンケート調査を行い、その現状を明らかにするとともに、その魅力を高め利用拡大を図るための方策を考えることを目的とする。

## 2.　研究方法

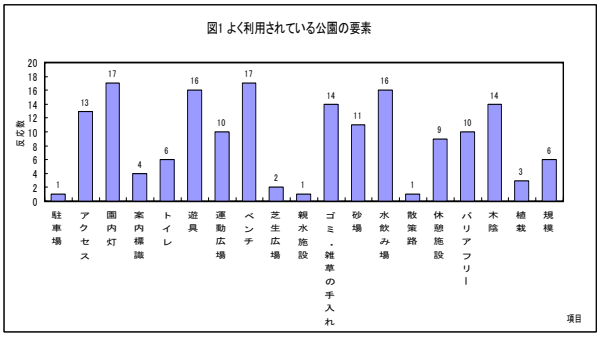
まず、公園の魅力となる要素として使いやすさと居心地のよさ、自然とのふれあいがあげられると考え、本研究では、それを利便性と快適性、自然性の 3 つに分けた。そして鳥取市周辺の公園（旧市街地のみ）と湖山池公園は公園の魅力となる要素の観点からみると、どのような位置づけになるのか比較するため、現地調査を行った。

次にそれらの公園の類似性を見出すために数量化Ⅲ類を適用してグルーピングを行い、グルーピングされた公園利用者の特徴を見つけるため公園利用者を対象に聞き取り調査を行った。そして湖山池公園の特性をみつけだし、さらに市民を対象に湖山池公園の認知、利用状況、整備評価等、湖山池公園に関するアンケート調査を行い、その結果をもとに湖山池公園の現状を明らかにしていき、利用拡大を図るための方策を考えた。

## 3.　現地調査と聞き取り調査の考察

現地調査と聞き取り調査の結果、公園利用者は、第一に遊ぶことを要求して利用している。そして、利用者が一番に優先としているものは、歩いていける程度の距離である。次に公園の規模であり、遊具やスポーツ施設の充実性も優先度に関係していると考えられる。よく利用されている公園の反応数の多い要素（図１）である遊具、運動広場、木陰はそれらの公園の利用目的にも関係していることがいえる。それらの公園には、遊具、運動広場、木陰があることが前提であると考えられる。

湖山池公園の特性は、10 代以下～10 代の子供の利用者がいないことと、利用時間が 1 時間未満であり短い利用であること、利用頻度も頻繁に利用されていないことである。




## 4.　湖山池公園の認知・利用状況に関するアンケート調査結果と考察

アンケートの結果、湖山池公園は、他の公園と比較して利用目的が遊ぶことではなく、自然に触れる、休憩、散歩という癒しを求めていることが明らかになったといえる。市中心地域と池周辺地域の認識と利用状況は、PR 不足という問題が大きく表れていることがわかる。市中心地域の PR 活動を進めていくべきである。年齢別においても、高い年齢層の利用が多く、若い年齢層、学生の利用は少ないことが明らかになったといえる。

各ゾーンの評価でお花畑ゾーンは、ベンチの数と木陰の量の評価が特に低いことがわかる。ベンチの増設、木陰をつくるような整備をしていく必要があると考えられる。子供の遊びゾーンは、トイレ、ベンチの数、雑草の手入れの評価が特に低いことがわかる。トイレの維持管理、ベンチの増設、雑草の手入れ管理をしていく必要があると考えられる。

## 5.　結論

湖山池公園の利用拡大には、まず各ゾーンで立地条件、利用、整備状況が明らかになっていることから、もう一度見直していくことが必要である。そして、公園全体の PR 活動を図る必要がある。そのためには、公園の造形的なシンボルをつくり、それが目玉にもなるようなものの存在が必要であると考えられる。また、湖山池公園はゾーンごとで点在しているため、公園としての一体性がないと感じられる。公園の核となる施設づくりも必要ではないかと考えられる。他の公園にはない湖山池という立地条件を十分に活かした公園づくりが必要であり、現状では、四季の景色を楽しむという利用しかなく、親水機能を持った遊びや、水辺を利用した施設等不足しているものが多くある。これらを満たしていく整備を行うことで、利用拡大を図ることができると考えられる。